

『山梨県総合郷土研究』における新民謡
—『微細郷土研究：加納岩町に関する』を参照して—

鈴木慎一郎

On New Folk Song in *Yamanashikensougokyoudokenkyu*:
Bisaikyoudokenkyu

SUZUKI Shinichiro

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第18巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.18 / No.2

令和3年12月15日発行 December 15, 2021

『山梨県総合郷土研究』における新民謡

- 『微細郷土研究：加納岩町に関する』を参照して -

鈴木慎一郎*

On New Folk Song in *Yamanashikensougokyoudokenkyu:*
Bisaikyoudokenkyu

SUZUKI Shinichiro*

キーワード：『山梨県総合郷土研究』、『微細郷土研究：加納岩町に関する』、新民謡、《縁故節》

Key Words: *Yamanashikensougokyoudokenkyu*, *Bisaikyoudokenkyu:Kanoiwa*, New Folk Song, “Enkobushi”

はじめに

本稿の目的は、山梨県師範学校・山梨県女子師範学校によって、1936（昭和11）年に編纂された『山梨県総合郷土研究』における新民謡の位置付けを明らかにすることである。

文部省は1930（昭和5）年、各師範学校に郷土研究施設費を交付し、全国の師範学校において郷土教育が展開される。各師範学校は郷土室を整備し、生徒主体の学習が開始される¹。

1932（昭和7）年5月、帝国図書館において開催された「郷土教育資料の陳列と講話」では、山梨県も出品し、高く評価される。同年8月、「郷土教育講習会」のプログラムの一つとして、郷土研究室の視察を設けられた際には、山梨県師範学校が選定される。

1935（昭和10）年、文部省は再び郷土研究施設費を交付し、山梨県師範学校・山梨県女子師範学校に『山梨県総合郷土研究』の編纂を行うよう示唆する²。

上記の動向の中心的な推進者は、文部省嘱託であった小田内通敏（1875-1954）であった。小田内は、1930（昭和5）年、尾高豊作（1894-1944）とともに、「郷土教育連盟」を設立した³。

先行研究としては、外池智（2004）が挙げられる。『山梨県総合郷土研究』の編纂の経緯とその構成・

内容にみられる特色、ならびに施策の目的等について豊富な資料に基づき、明らかにされている⁴。本稿では外池の研究の蓄積に基づき、新民謡に焦点を絞り、掲載の内容分析を通して位置付けを解明したい。

これまでに筆者は、2018（平成30）年、教育史学会第62回大会において、「師範学校の郷土教育における民謡の実践：鳥取県師範学校を事例として」を発表した。そこでは鳥取県師範学校の郷土研究の方法として、『山梨県総合郷土研究』と柳田国男『郷土生活の研究法』（刀江書院、1935年）に基づいて展開されていた点を明らかにした。1939（昭和14）年、成果として発行された『郷土研究紀要 第一輯 因伯民俗調査』ならびに生徒の研究報告書には、《新民謡 貝殻節》が掲載されている点を究明し、師範学校や小学校の教員が新民謡の普及に積極的に関与していた点を指摘した。

上田誠二は、戦前・戦中の音楽を「芸術文化・学校文化・大衆文化」に分け、「学校文化」と「大衆文化」が対立する側面があったと言及する⁵。新民謡は「大衆文化」に該当するが、多くの師範学校のモデルとされた『山梨県総合郷土研究』における新民謡の位置付けは、注目に値する。

研究方法としては第一に、山梨県師範学校・山梨県女子師範学校の変遷を概観する。第二に、『山梨県総合郷土研究』の編纂の経緯や特色を概観する。第三に、『山梨県総合郷土研究』における民謡に着目し、

*鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース

新民謡の位置付けを明らかにする。第四に、1937(昭和12)年に発行された、山梨県女子師範学校編『微細郷土研究：加納岩町に関する』における新民謡の位置付けを明確にする。以上の作業を通して、山梨県師範学校・山梨県女子師範学校の郷土教育における新民謡の位置付けを解明する。

I. 山梨県師範学校・山梨県女子師範学校の概観

1. 徴典館

1724(享保9)年、甲府藩は廃藩となり、幕府直轄領化される。学問を推奨した、松平定信の寛政の改革を受け、1796(寛政8)年、「甲府学問所」が創設される。1805(文化2)年、「徴典館」と改称する。「徴典」は、中国古代の歴史書の『書経』の「舜典」における「慎徽五典」(慎しみて五典を徴くす)から採り、「徴典館」とは人倫五常(「五典とは五常なり。父子は親あり、君臣は義あり、夫婦は別あり、長幼は序あり、朋友は信あり、とはこれなり)の道を修める所という意味である⁶。

ところで1797(寛政9)年、林家の私塾であった「昌平黌」は、幕府の直轄の「昌平坂学問所」に改変される⁷。その分校として、甲府の「徴典館」や駿府の「明新館」⁸等が該当した。

2. 山梨県師範学校・山梨県女子師範学校の変遷

1873(明治6)年、徴典館は「開智学校」と改称され、個人単位の教授法から団体本位の教授法となる。1874(明治7)年、「師範講習学校」、1875(明治8)年には、「山梨県師範学校」と改称される。

1878(明治11)年、「附属女子師範学校」が開講され、山梨県における女子中等教育が始まる。1881(明治14)年、「附属山梨女学校」と改称され、「女子小学師範科」と「女子高等普通学科」が置かれる。

1881(明治14)年、師範学校と中学校が合併され、「山梨学校」と改称し、「師範科」と「中学科」が置かれ、さらに「医学科」が加わる。

1882(明治15)年、再び「徴典館」と改称され、「漢学科」が加わる。1883(明治16)年、医学科は県立病院内に復した。

1886(明治19)年4月、附属山梨女学校の女子高等普通学科が廃止となり、女子小学師範科については、「徴典館女教場」となる。

同年12月、師範学校令に基づき、徴典館は「山梨県尋常師範学校」と改称され、猛烈な軍隊式の訓練を施すに至る。女子生徒も在籍した。1890(明治23)年、教育勅語が発せられる。

1898(明治31)年、師範教育令に基づき、「山梨県

師範学校」と改称される。1910(明治43)年、甲府市錦町(現在、中央一丁目の中央公園)から、甲府市武田(現在、山梨大学)の新校舎に移転する。

1924(大正13)年、女子部が分離されて、「山梨県女子師範学校」が設立される。校舎は山梨市に移り、山梨県立山梨高等女学校(現、山梨県立山梨高等学校)も併設される。

1943(昭和18)年、「官立山梨師範学校」と専門学校程度へと昇格し、男子部と女子部が置かれる。

戦後の1949(昭和24)年、「山梨大学学芸学部」と再編される⁹。

3. 特色

明治当初においては、ペスタロッチ(Johann Heinrich Pestalozzi, 1775-1829)の開発主義を取り入れた教育の研究に取り組んでいた。1878(明治11)年、文部省は理科教育の推進のため、米国から購入した機械百余点を交付する。この動向を受け、「日本活地図」の工事を開始する。日本活地図というのは、校庭に作った日本の模型のことである。周囲の土を盛り上げ、山には木を植え、川には小石を並べ、琵琶湖の湖水には水をためる等、実際に似せて造り、火山等は下に火を燃やす設備を加えた。そして周囲には水をたたえ、小舟で日本海や太平洋を漕ぎ回れるようにした。この工事に生徒も教職員も三か年を費やし、1881(明治13)年に完成する。しかしながら、1887(明治20)年、日本活地図は、運動場の確保のため埋められる¹⁰。

1920(大正9)年、水晶の収集・鑑定に携わっていた百瀬康吉(1867-1937)から、貴重な水晶の標本の寄贈を受け、これらを保存・展示するために、1927(昭和2)年、鉄筋コンクリート造りの「水晶館」が建設される。1930(昭和5)年度以降、郷土室の第三室となり、郷土教育としても活用される。1945(昭和20)年7月6日の空襲では、男子部の校舎がほぼ全焼した中、免れる¹¹。2020(令和2)年、国の登録有形文化財に指定される。

II. 『山梨県総合郷土研究』の概観

1. 『山梨県総合郷土研究』編纂の経緯

大正時代には、夏・冬休暇あるいは休日等を利用して、植物・動物・地質鉱物等の研究調査旅行を実施していた。1915(大正4)年には、大正天皇御大典記念事業として郷土室が設置される¹²。

昭和の初め頃、山梨県師範学校教諭の笠井恵祐が

甲府盆地における集落についての研究発表をした。その論文が、内田寛一、小田内通敏らの激賞を受け、機関紙『地理教育』に掲載されるに至った。このことが機縁になって、小田内通敏と笠井恵祐の親交が始まる。さらに校長の鈴木利平（1871-1962）の懇請によって、小田内はたびたび来校講話を行い、結び付きを深めていった¹³。

1930（昭和5）年、郷土研究施設費の交付により、第一から第五までの郷土研究室を整備した。第一郷土研究室は、郷土の大観、資料の分類整理、第二郷土研究室は、職員生徒の研究発表、第三郷土研究室は、水晶の原石と加工品、第四郷土研究室は、郷土の位置と特性、第五郷土研究室は、郷土作業場となる。1932（昭和7）年には、山梨県師範学校附属小学校に第六郷土研究室が設けられる¹⁴。

1932（昭和7）年5月、帝国図書館にて開催された「郷土教育資料の陳列と講話」において、山梨県は郷土研究室の展示物を出品し、小田内から高い評価を受ける。同年8月、「郷土教育講習会」のプログラムの一環として、山梨県師範学校の郷土研究室が視察対象校として選定される。1936（昭和11）年においても視察対象校となり、師範学校の模範に位置付けられる¹⁵。

全国の師範学校に対しての通牒が発せられる一カ月前の1935（昭和10）年11月2日、小田内は山梨県を訪れ、午前中に山梨県県会議事堂において県の各部長、各課長、視学等に対し、『山梨県総合郷土研究』編纂の趣旨を説明し、研究調査項目を提示して各位の意見を集めるとともに、研究調査資料の収集に関する協力を求めていた。午後、同所において男女両師範学校長と教職員を集め、編纂の趣旨を説明し、さらにその項目を提示して意見を求めるとともに質疑応答を行い、両校の共同研究の承認を得て、両校から郷土研究委員が選定された。委員選定に当たっては、「結論」と「特殊研究」を除いた「生活環境」「歴史的発達」「人口」「聚落」「産業」「交通」「行政」「経済」「社会」「文化」の10項目にわたって、各部門の諸事項を実際に研究調査する研究委員と、各部門の研究調査を総括する主任が置かれることになった。なお、編集実施に当り、小田内は県立図書館内に郷土研究事務室を特設し、助手である息子の小田内通久、柴三九男らとともに、1936（昭和11）年6月末まで甲府市愛宕町に居を構えて編纂に取り組む。

11月15日、「山梨県郷土研究協議会」を県教育会館において開催し、各部門の研究主任と研究委員が選定された。11月21日には県教育会館において、各部門主任打ち合わせ会が開かれ、副主任の設置と、

研究調査の報告（草案）の提出期限を1936（昭和11）年1月10日とすることが決まる。11月29日には山梨県師範学校、12月5日には山梨県女子師範学校において「文化」に関する部会が開かれる。

研究調査の報告（草案）の提出期限は、1936（昭和11）年3月5日に延期される。2月24日には山梨県師範学校、2月26日には山梨県女子師範学校において「文化」に関する部会が開かれる。

3月8日には、山梨県主催により「郷土教育講習会」が県教育会館において実施され、文部省から囑託の小田内と山崎庶務課長が招かれる¹⁶。

研究調査の報告（草案）が提出され、4月16日、以下が編集委員として選定される¹⁷。

山梨県師範学校

笠井恵祐、矢崎好幸、橘田務、桂川七郎、小林定男

山梨県女子師範学校

志村まつ代、百瀬正男、鈴木はん、内山克己、向島安市

夜を徹して作業が行われ、1936（昭和11）年12月15日、『山梨県総合郷土研究』が印刷され、12月20日に発行となる¹⁸。

2. 『山梨県総合郷土研究』の特色

発行された『山梨県総合郷土研究』の目次は以下の通りである。

生活環境

歴史的発達

人口

聚落

産業

交通

行政

経済

社会

文化

結論

特殊研究

外池は特色として「①自然地理学的視点からではなく人文地理学的視点を加え、より多角的に考察することを目指していたこと、②大項目の最初に「生活環境」が設定されている様に郷土での生活者の視点を重視していたこと、③研究のまとめとして「綜

合」的に考察する視点を重視していたこと」を挙げる¹⁹。

Ⅲ. 『山梨県総合郷土研究』における民謡

1. 『山梨県総合郷土研究』における民謡

『山梨県総合郷土研究』において「民謡」は「文化」の大項目の中に掲載される。「文化」は以下の中項目によって構成される。

- 一 地方文化の胎生
- 二 地方気質の生成
- 三 人物とその業績
- 四 神社宗教の郷土的特徴
- 五 史的記念物
- 六 民俗
- 七 郷土芸術
- 八 文化施設
- 九 教育の動向

「七 郷土芸術」は、以下の通り、構成される。

- 1 民謡
- 2 舞踊
- 3 人形芝居と郷土
- 4 手芸・工芸, 附録

「1 民謡」は、840 から 847 ページにかけて、「序言」、「伝統的民謡」、「移入された民謡」、「新作民謡」、「緒言」の順で構成される。執筆は、音楽ではなく、手工を専門とする、山梨県師範学校教諭の中山耕一郎(1894-1979)によってなされる。中山は1912(明治45)年、神奈川県川崎小学校(現、川崎市立川崎小学校)の代用教員となり、1916(大正5)年、尋常小学校本科正教員の検定に合格し、1917(大正6)年、訓導に昇格。1933(昭和8)年、山梨県師範学校教諭となる²⁰。ちなみに、音楽を専門とする、同校教諭の坂口五郎²¹は「社会」の中の「八 娯楽」(pp. 676-695)を執筆した。

1927(昭和2)年、山梨県師範学校本科第一部を卒業し、1935(昭和10)年、同校専攻科を卒業した澤登初義(1907-)は、次のように証言する²²。

昭和2年、山梨県師範学校を卒業した私は、歩兵第四十九連隊に入隊、短期現役兵の教育を受けた後、訓導と呼ばれる、青年教師として、中牧、日下部、一宮の小学校に奉職したわけです。

しかし、生涯をかけて、教育の道一筋に生きる為には、より力を身につけておかなければ、第一教師を選ぶことの出来ない子ども、その親に対して申しわけない、すまない、と考えて昭和10年、母校の専攻科にはいりました。

当時、師範学校を中心に、郷土の研究が、盛んに行われていましたが、図らずも中山耕一郎教諭(神奈川県出身)から、郷土民謡調査の協力を求められました。

私は幼い頃から、わらべ唄や、郷土の民謡に心を惹かれ、師範の本科生の頃、夏休みの研究課題として中巨摩郡の民謡とわらべ唄の調査にとり組み、これを「野に咲く花」と題して、謄写版刷りの小冊子にまとめた経験がありますので、「私に出来ることでしたら、」

と、お手伝いしたわけですが、それが昭和15年に山梨県で刊行した大冊『総合郷土研究』に郷土民謡として掲載されております。

専攻科は「本科ノ学科目又ハ之ニ関連スル学科目ニ付精深ナル程度ニ於テ学修ヲ為サシムルヲ以テ目的」とし、修業年限は1年で、「修身」(毎週教授時数2)、「哲学」(3)、「教育」(4)、「国語漢文」(3)、「実業」(3)、「体操」(2)を必修とし、「選択科目」(10)の計27時数、課せられた²³。「選択科目」は「公民科」、「心理及論理」、「国語」、「漢文」、「歴史」、「地理」、「英語」、「数学」、「理科」、「実業」、「図画」、「手工」、「音楽」の中から2科目以上選択することになっていた。澤登は、1935(昭和9)年度、専攻科に在籍し、1936(昭和10)年度は、鯉沢尋常高等小学校(現、富士川町立鯉沢小学校)訓導に戻っているため、『山梨県総合郷土研究』の原稿執筆は、小学校訓導を勤めながらの作業であったと推察される。

「序言」では以下の通り、始まる²⁴。

民謡は甲斐に於ても古くから相当行はれて居たらしく、平安朝の中期に書かれた彼の土佐日記の一節に、「西の国なれど甲斐の歌など謡ふ」とあるを見ても、其の一端を窺ふことが出来る。夫れは風俗歌と称され、二十五曲、二十六首より成つてゐるので、甲斐の歌としては次の二首が挙げられてゐる。

甲斐が嶺を さやにも見しが 心なく
横ほり立てる 小夜の中山
甲斐が嶺に 白きは雪か いなをさの
かひの褌衣や 晒す調布や 晒す調布や

その後、室町時代から歌舞、音曲、雑伎等、一般に行はるるに及んで民謡も次第に盛んとなり徳川期に入つて隆盛を極めた。今日民謡の中で伝統的なものはこの時代のものが多く伝承されてゐる。

猶これと同時に他地方より移入せられて夫れが郷土化されたもの、又新作せられたるもの少ない。特に、近来流行せる歌謡曲なるものは、全県下に行はれ、古来よりの郷土色豊かな民謡が漸く忘れられやうとしてゐる。しかし、又一方には、郷土愛を主とする歌謡を新作奨励し、此等地方的新民謡に依つて青年男女に高尚な趣味と健全な気風を養はしめようとする傾向が著しくなつて来た。

「伝統的民謡」については、以下の通り分類されて、紹介される。譜例はないが、曲名は付けられており、歌詞の一部が列記されている。解説が記されている民謡もある。

- 一 宗教的歌謡
- 二 祝歌
- 三 盆踊の歌
- 四 労働に関する歌
 - 地槌き歌
 - 臼挽歌
 - はなどり歌
 - 田植歌
 - 田の草取の唄
 - 草刈唄
 - 紙漉唄
 - 粘土節
 - 機織り唄
 - 縄なひ唄
 - 麦打唄
 - 薪採り唄
 - 野良唄
- 其の他の労働歌
 - 木綿ホカシ歌
 - 木綿糸とり唄
 - 煙草巻き唄
 - 船頭唄
 - 製糸工女の歌
 - 瓦焼きの唄
 - 楮草打歌
 - 御用紙歌
- 五 その他の民謡

六 童謡

「四 労働に関する歌」の中に《粘土節》が以下の通り、解説されている²⁵。

粘土節は明治四十三年以前、釜無川堤防工事中粘土を搗く為め多くの女土工を用ひたが、其の中に中巨摩郡小井川村にお高なる女性があり、天性の美声で労働中唄つた歌が、この工事場全般は勿論近隣の評判となり、それが現今に至るまで伝唱されたもので、最近昭和三年及昭和十年に「山梨県民謡の夕」に本県民謡を代表して全国に放送された。

この歌は粘土を固める地搗きの歌で、多くは粘土搗きの状況を唄つたもの、中には恋愛・社交等の意を含むものもある。而して最後の囃詞に粘土を搗く音を取つて居るのは特色がある。

ハアー うちの細みちよ よく来てくれた
さぞや ぬれつら豆の 葉に
アーゴツシヨン ゴツシヨン
来たり来なんだり夏せぎの水
そんなにいやならきちよばよい
アーゴツシヨン ゴツシヨン

《粘土節》は1926（大正15）年、日本青年館で開催された「第二回郷土舞踊と民謡の会」に山梨県を代表とする民謡として出演した。上記の通り、1928（昭和3）年には「山梨県の夕」というラジオ放送にも出演する²⁶。

「五 その他の民謡」では、《えぐえぐ節》が以下の通り、解説されている²⁷。

この歌は今から約百六七十一年前に、北巨摩郡駒城村字柳澤に発祥したものといはれる。大武川の溪谷にある村落で、「縁で添ふとも」といふ歌はよく此処の生活を現わしてゐる。

サアサエグエグ
縁で添ふとも 柳澤はいやだ コリヤセ
女が木を切る 茅を刈る シヨンガイネ
米のなる木で作つた わらぢ
踏めば 小判の跡がつく

《えぐえぐ節》は新民謡《縁故節》の基になった農作業唄である²⁸。「北巨摩郡駒城村字柳澤」は、現在の北杜市にあたる。《縁故節》については後述したい。

2. 『山梨県総合郷土研究』における「移入された民謡」

「移入された民謡」では、次のように説明される²⁹。

古来よりの民謡に対し他地方から移入せられた民謡も亦其数が極めて多い。これは本県人は他へ行商や出稼ぎに行き、出先で覚えた民謡を郷土へ広めたこと、及び時代々々の流行につれ他国人の出入等によつて移入されたものであらう。これ等の歌は、或は盆踊に、或は労作に、或は祝儀、或は青年団の娯楽会に、或は敬老会の余興等に用ひられて来た。

主なものとして以下が列記される³⁰。

《木曾節》《よさこい節》《ラツパ節》《サノサ節》
《機械ぶし》《八木節》《安来節》《小原節》《串本節》
《佐渡おけさ》《追分》《かつぼれ》《東京音頭》
《旅笠道中（映画主題歌）》

これらの14曲の中で伝統的民謡は、長野県の《木曾節》、高知県の《よさこい節》、栃木県・群馬県の《八木節》、島根県の《安来節》、新潟県の《佐渡おけさ》、北海道の《追分》の6曲(42.9%)である。

《ラツパ節》、《サノサ節》、《かつぼれ》の3曲(21.4%)は流行唄に該当する。《旅笠道中》の1曲(7.1%)は映画主題歌である。

《機械ぶし》、《小原節》、《串本節》、《東京音頭》の4曲(28.6%)は新民謡に該当する。

どのような基準で選曲されたかを探るために、以下、伝統的民謡、流行唄、映画主題歌、新民謡に区分して、各曲の特徴を概観したい。

(1) 伝統的民謡

《木曾節》に関しては、特別に次のように解説される³¹。

是等の中で最も多く且つ奨励されてゐるのは木曾節である。これは昭和二年、当時の青年男女が野卑な歌を唄ひ、且つ娯楽機関が少いので皆映画館等に赴くを患へ、県農会や社会課等で木曾節を奨励し優勝旗等を授与したので一層盛んになった。

《木曾節》を含めてこれらの移入された民謡は、県内外での人の出入りによって広がったと説明され

る。しかし、これらの曲の大部分は、SPレコードとして発売されている。したがって、以下では各曲とSPレコードの関係を整理したい。

《木曾節》は、長野県木曾郡木曾町においてお盆に唄い踊られている。木材を運送するために木曾川を利用する際に唄われていた《名乗りさん節》が、1915(大正4)年、観光を宣伝するために《木曾節》と改められた。1928(昭和3)年、ビクターレコードから三島一声(1889-1974)の歌うSPレコードが発売される。1931(昭和6)年には、キングレコードからも発売される³²。

《よさこい節》は、高知県高知市のお座敷歌。源流は、鹿児島県鹿児島市の《鹿児島夜さ来い節》であり、鯉船の漁師等によって土佐地方へ伝えられた。1935(昭和10)年、ビクターやコロムビアからSPレコードが発売された。なお、《鹿児島夜さ来い節》については、1931(昭和6)年、ビクターからSPレコードが出されていた³³。

《八木節》は栃木県・群馬県の盆踊り唄。源流は新潟県十日町の《新保広大寺》で、瞽女たちによって日本中へ広められた。1914(大正3)年、ニッポノホン(コロムビアレコードの前身)からSPレコードが出される³⁴。

《安来節》は島根県安来市のお座敷唄・遊芸唄。源流は鳥取県境港市の《さんこ節》であり、安来港にも伝えられ、芸者衆が好んで唄うようになった。1916(大正5)年、フジサンレコードから発売され、よく売れた³⁵。

《佐渡おけさ》は新潟県佐渡島の踊り唄・酒盛り唄。《相川おけさ》と呼ばれており、1926(大正15)年、ラジオで初放送した。同年、ニッポノホンから発売される際に、《佐渡おけさ》と改名される³⁶。

《追分》の源流は、信州追分宿(長野県北佐久郡軽井沢町追分)の酒席で唄われていたお座敷唄であった。それが新潟港に伝わり、さらに北前船にのって東北から北海道に広がり、松前、江差などで唄われるようになる。明治30年代(1897~1906年)に入ると、鉄道が広がり、北海道の玄関口は江差から函館へと移る。江差の花柳界は廃れ、追分も消えていった。1910(明治43)年、「追分節大会」が開催されたものの、唄い方や節の運びがまちまちであった。1912(明治45)年頃、平野源三郎は、ニッポノホンに吹き込む。1912(明治45)年、東京で「追分を聴く会」が開かれ、好評で、「公開演奏会」も追加され、大評判となる。1916(大正5)年、コロムビアから越中谷四三郎が唄うSPレコードが発売される³⁷。

(2) 流行唄

《ラッパ節》(上記では《ラツパ節》)は、1904(明治37)年の日露戦争の頃、流行した三絃調の流行唄である³⁸。

《サノサ節》は、日清戦争に勝利した1895(明治28)年に流行した三味線調の流行唄である³⁹。

《かつぼれ》(上記では《かつぼれ》)は、幕末の頃、平坊主(1844-1871?)の一座が大道芸として演じ始めた後、明治初期から昭和初期にかけて大流行する。1903(明治36)年、《かつぼれ》は初めてSPレコードに吹き込まれる⁴⁰。

(3) 映画主題歌

《旅笠道中》は「映画主題歌」と記されている通り、1935(昭和10)年に公開された映画「東海の顔役」(サウンド版トーキー、松竹キネマ)の主題歌で、藤田まこと作詞、大村能章作曲である⁴¹。

(4) 新民謡

《機械ぶし》は《八王子機械ぶし》とも呼ばれ、群馬県の昭和時代の新民謡である⁴²。1929(昭和4)年、永井白湄(1895-1974)作詞、中山晋平(1887-1952)作曲により、《オリャッセ節》としてビクターからSPレコードが発売される(50865)⁴³。A面では藤本二三吉、B面では八王子芸妓連が唄う。《八王子民謡》の副題もある。水谷八重子の振付で、1929(昭和4)年に放送される。

《小原節》は鹿児島県鹿児島市のお座敷唄。1931(昭和6)年、鹿児島商工会議所では、「国産新興博覧会」に向けて新民謡をつくるために、中山晋平と西条八十(1892-1970)を招いた。その宴席に芸者の喜代治が《鹿児島オハラ節》を唄った際に、中山が大変気に入りビクターレコードから発売されることになった。1934(昭和9)年にポリドールレコードから発売され、大流行する⁴⁴。

《串本節》は和歌山県東牟婁郡串本町のお座敷唄。1924(大正13)年、アメリカの世界一周の水上飛行機が串本にやってきた。芸者衆の唄っていた《オチャヤレ節》が人気となり、1925(大正14)年、ニッポレコードから《串本節》として発売される⁴⁵。

1932(昭和7)年、ビクターから発売された、西条八十作詞、中山晋平作曲の《丸の内音頭》の旋律に新たに作詞され、《東京音頭》が1933(昭和8)年、発売され、大ヒットする。したがって、新民謡に該当する⁴⁶。

以上の通り、これらはSPレコードとして発売さ

れ、全国的に流行した曲である。「移入された民謡」ということで、ここには山梨県の民謡は含まれていない。

3. 『山梨県総合郷土研究』における「新作民謡」

「新作民謡」では、次のように説明される⁴⁷。

新作民謡は、次ぎ次ぎに流行した歌を模して作られたものと、郷土愛の発露に依つて生まれたもの、郷土開発の為に作られたもの等、何れも技巧的な歌であつて、其の数は凡そ五十種程である。

以下の40曲が列記される。すべて山梨県の新民謡である⁴⁸。

《縁古節》《山梨遊覧小唄》《甲斐車窓行進曲》
《甲府セレナーデ》《恵比須講音頭》《鉦山音頭》
《下部音頭》《桑戸音頭》《富士川音頭》《四方津音頭》
《上野原音頭》《梁川音頭》《四尾連湖音頭》
《笛吹音頭》《河口湖遊周歌》《甲斐の四季》《葡萄おけさ》
《勝沼行進曲》《葡萄小唄》《紅葉台小唄》
《栗原小唄》《郡内音頭》《甲州音頭》《甲州小唄》
《郡内小唄》《つつじ音頭》《小沼音頭》《鎌田小唄》
《河口小唄》《御嶽昇仙峡の歌》《富士音頭》
《精進音頭》《鯉澤音頭》《身延音頭》《本郷音頭》
《葦崎小唄》《清里音頭》《組合音頭》《ラヂウムの歌》
《高原の唄》

「これ等新作歌の中、代表的なのは《縁古節》である」と続き、下記の通り、解説される⁴⁹。

《縁古節》は北巨摩郡駒城村に起つた《エグエグ節》を昭和3年に現在葦崎町の小屋忠子氏が郷土開発の為に、原歌を三味線、尺八、琴等に合せて改作したもので、同年4月、山梨県民謡の夕に、ラヂオを通して全国に放送し、次いで昨年10月再び全国に放送して有名となつた。歌詞の内容及び曲節は大體《エグエグ節》と大差がない。

1924(大正13)年、葦崎の有志によって、鳳凰山とそれに続く南アルプス連峰の登山基地として観光開発しようという目的により、「白鳳会」が結成される。初代会長は小屋忠子(歯科医師、後に県会議長)、柳本経武(郵便局長)、平賀文男らが協力者であった。《縁古節》(上記では《縁古節》)は白鳳会の宣伝の

ために、上記の3名と土地の芸妓たちによって、《エグエグ節》を編曲してつくられる。発表年に関して、上記では「昭和3年」となっているものの、試聴会に参加した植松逸聖によると、1925（大正14）年7月である⁵⁰。

1928（昭和3）年9月6日には、東京中央放送局から、放送事業開始三周年記念番組民謡の部に、山梨県代表民謡として《縁故節》が選ばれ、地元韮崎の人による演奏により、全国放送される。続いて、1935（昭和10）年11月20日、再び東京中央放送局から放送される。その放送を聴いたビクターレコードの重役からレコード化の話まで進んだものの、重役が退陣したこともあり、実現はできなかった。1937（昭和12）年の暮れには、甲府放送局開局記念に《縁故節》が全国放送される。1939（昭和14）年、コロムビアから、地元の中村千代子が唄うSPレコードが発売される⁵¹。歌詞は以下の通り⁵²。

- 一、縁で添うとも 縁で添うとも
柳沢いやだヨ
※アリヤセー コリヤセー
女が木をきる 女が木をきる
茅を刈る ションガイナー ※
- 二、河鹿ほろほろ 釜無下りやヨ ※
鐘が鳴ります 七里岩 ※
- 三、縁の切れ目に このぼこできたヨ ※
この子いなぼこ 縁つなぎ ※
- 四、縁がありや添う なければ添わぬ ※
みんな出雲の 神まかせ ※
- 五、駒の深山で 炭焼く主は ※
今朝も無事だと 白煙 ※
- 六、来たら寄っとくれんけ
あばら家だけんど ※
ぬるいお茶でも 熱くする

《縁古節》以外の39曲については、現在の段階で所在が明らかになった点について整理したい。

《甲州音頭》は野口雨情（1882-1945）作詞、中山晋平作曲の新民謡である。東京日日新聞が日本八景の投票を行った際、昇仙峡と富士五湖が入選し、その記念としてつくられる。1928（昭和3）年3月、彼らは甲府商業会議所を訪れ、発表する⁵³。松竹蒲田映画「希望」の中で使われる。また、同年8月、ビクターから甲州芸妓連が唄うSPレコード（50386）が発売される⁵⁴。A面に《甲州音頭（上）》、B面に《甲州音頭（下）》が録音される。歌詞は以下の通り⁵⁵。

- 一、富士は東に アリヤ 御岳は西に
音頭とるなら まん中に
※ヨイトナ ヤレ ヨイトナ
音頭とるなら まんなかに
※スッチョコ スッチョン スッチョンナ
ヤーレ スッチョン スッチョンチョン
- 二、杉になるなら アリヤ 御岳の杉に
御岳三柱の 守りの杉に ※
御岳三柱の 守りの杉に *
- 三、山が寒うなりや アリヤ どの木の陰で
雉のめん鳥や 寝るのやら ※
雉のめん鳥や 寝るのやら *
- 四、甲州あね様 アリヤ 聞いたか見たか
葡萄にや 仇花 咲きやしない ※
葡萄にや 仇花 咲きやしない *

《甲州小唄》は西条八十作詞、町田嘉章（1888-1981）作曲の新民謡である。町田は次のように語る⁵⁶。

この唄は昭和3年10月に甲府の新聞連合会の依頼で西条八十作歌、町田嘉章作曲、藤陰静枝（当時藤間）振付で作ったものである。同市にはこの時既に中山晋平作所の名作《甲州音頭》あり、それと曲趣が即かないよう三絃本位の技巧歌として貰いたいと云ふ希望のものに作曲した。現在《甲州音頭》と共に同地方の宴席を賑はしつつある。

1928（昭和3）年10月につくられ、1929（昭和4）年2月に、ニッポノホンから甲州芸妓連中が唄うSPレコード（17146）が発売される。A面に《甲州小唄（上）》、B面に《甲州小唄（下）》が録音される。歌詞は以下の通り⁵⁷。

- 一、御嶽新道のひとと桔梗 ナアエ
折つて来たのも露に濡れたもそなた故
※今夜も逢へるか逢へぬやら
心細さに出て来れば
あつちを向いても山々
こつちを向いても山々
風に木の葉の音ばかり
- 二、甲府よい町荒まくら ナアエ
山に抱かれてうつらうつらとねて御座る
※
- 三、甲斐はよい国水晶の国よ ナアエ
いつも曇らぬ晴れて長閑な人心 ※
- 四、富士の湖数へて七つ ナアエ

七つうつした朝よ夕なのお月さま ※

《甲府セレナーデ》は《甲府夜曲》とも表記され、西条八十作詞、中山晋平作曲で、1931（昭和6）年に発表される。山梨日日新聞社の委嘱である。歌詞は以下の通り⁵⁸。歌詞は『山梨県総合郷土研究』には掲載されていないものの、「恋」が多用され、恋愛をうたった新民謡も取り上げられていた。

- 一、春は舞鶴 お城のさくらよ
恋のベンチの花吹雪
泣いて別れりゃ 山さへ曇る
やるせないぞへ 雪の富士
※恋し甲府の あの日の夢よ あの夢よ
- 二、甲府銀ぶら 三日町見附よ
ネオンサインは 恋の色
シネマ帰りの あの娘の襟に
更けてキスする おぼろ月 ※
- 三、夏の涼みは 荒川あたりよ
恋のボートの 二人づれ
楽し遭ふ瀬を 三ツ水門の
波にうつした 片えくぼ ※
- 四、日切地蔵に、両手をあはせよ
君を松風 一蓮寺
しのぶこころも 若松通り
ながす浮名の 濁川 ※

《甲斐車窓行進曲》は、山梨日日新聞社が「甲斐車窓十景」と「甲斐車窓曲」を募集した際、西条八十により選ばれた、市川青児が作詞する。中山晋平により作曲され、1931（昭和6）年5月に発表される。歌詞は以下の通り⁵⁹。

- 一、舟がみえまず鮎釣舟が
碧いながれのアノ桂川
恋の猿橋もみじの雨に
粋な蛇の目の忍び遭ひ
- 二、煙がたちます差出の磯の
松に隠れたアノキャンピング
夏に別れて盆地の月は
夜永葡萄の露とねる
- 三、雨が降ります桜の雨が
巨摩の長坂アノ富士見坂
八ツは朝やけ鳳凰は夜明け
間の日野春馬で越す
- 四、蛍飛びます鎌田の水に
泣けぬ哀れがアノ身をこがす

可愛や甲府城お濠の柳
風にみどりの身を任す
五、鐘が鳴ります身延の鐘が
早瀬富士川アノ日ぐれごろ
合す音頭の曳綱舟に
肩も砕けと飛ぶしぶき

《恵比須講音頭》は、1934（昭和9）年11月、篠原春雨作詞、中御門忠泰作曲、花柳徳吉振付によってつくられる⁶⁰。

《郡内小唄》の作曲者は不明だが、作詞者は野口雨情である。歌詞は以下の通り⁶¹。「郡内」とは、山梨県東部の地域を意味し、現在の犬伏市、都留市、上野原市、北都留郡丹波山村、南都留郡道志村が該当する。

- 一、甲州郡内 甲斐絹の産地
※唄は粋なもの 袂に入れて
富士の白雪の 水で織る
*ソリヤ 粋なもの
- 二、桂川から 木の葉が流れ ※
流れ木の葉から 秋と読む *
- 三、甲州名どころ あの猿橋を ※
水の流れを（ネ） 見て渡る *
- 四、富士の山さへ 郡内からは ※
後姿を（ネ） 一眺め *

《身延音頭》は結城玉容作詞、町田嘉章作曲の新民謡である。歌詞は以下の通り⁶²。

- 一、えー
富士の白雲朝日に映ゆりや
木曾の御嶽は薄化粧
愛の身延はね
愛の身延は此の世の浄土
心とどめた法の山
※さアさ身延へ参らんせ 参らんせ
- 二、えー
玉と砕いた御親の姿
袖に時雨の御しんこつ
浮世三世のネ
浮世三世の罪さへ消えて
嬉し涙に暮れの鐘※
- 三、えー
軒のささがに玉糸つらね
深山住ひの静寂さに

揺るぐ木草もね
揺ゆぐ木草も流るる水も
草の庵に妙の声※

《富士川音頭》は、富士川沿岸の西八代郡市川三郷町、南巨摩郡富士川町、南巨摩郡身延町等で唄われた盆踊唄である。昭和初年、市川大門町農会の委嘱を受けた平賀文男(1895-1964)がつくった。平賀は前述の《縁故節》の協力者でもあった。南巨摩郡南部町の旅籠屋に平賀が泊った際に女中から聴いた《富士川船頭唄》の新鮮な印象が忘れられず、その曲を基につくったとされる。歌詞は以下の通り⁶³。

- 一、富士川下れば 岩渚泊まりよ
※ヤッコラセー ヤッコラセー
明けりゃ身延へ ヤレコノセ 引き小舟よ
※
- 二、万沢十島 船場へ六里よ ※
駿河堺へ ただ一里よ ※
- 三、舟は帆あげて 川瀬を上るよ ※
可愛い妻子は 出て招く ※
- 四、波高島から 下部へ一里よ ※
泊りゃ湯の町 雨となる ※
- 五、波は船べり どどんとたたくよ ※
ぬれて棹さす 屏風岩よ ※

《山梨遊覧小唄》の歌詞は以下の通り⁶⁴。

- 一、雪の紅帯 七面山に
解けて身延は明けの鐘
うちわ太鼓の音からさめて
町のうち水虹がたつ

《甲州音頭》に関しては、1933(昭和8)年8月、千田冬彦作詞、藤井清水(1889-1961)作曲によってもつくられている⁶⁵。1934(昭和9)年1月には、ビクターから三島一声(1889-1974)が唄うSPレコード(52975)が発売される。

B面には、長田幹彦(1887-1964)作詞、藤井清水によって1933(昭和8)年7月に作曲された《山梨小唄》が録音される⁶⁶。市丸(1906-1997)が唄う。

《下部音頭》は関根利根雄作詞、関本京静作曲の新民謡である。歌詞は以下の通り⁶⁷。

- 一、富士と身延がすそかにかき合わせ

- コラショイ
あいの富士川 桜のかげに
招く下部の湯のけむり
ヨイヨイヨイトコ シヤシヤントナ
下部よいとお湯の里 お湯の里
- 二、一度おいでよ 青葉のころは コラショイ
あゆのしぶきに浴衣がぬれりゃ
お湯の情けに身もぬれる
 - 三、呼ぶは湯の香か かじかの声か
コラショイ
五湖を鏡に薄紅つけて
月もこよいはあいにくる
 - 四、昔武田のつわものたちが コラショイ
傷をなおした隠し湯どころ
渡るかりにも しのぶ夢
 - 五、身延参りのちよっと道すがら コラショイ
行きに寄ろうか 帰りに寄ろうか
いっそ行きにも帰りにも

『山梨県総合郷土研究』では紹介されていないが、野口雨情作詞、中山晋平作曲の新民謡として、《下部小唄》がある。下部温泉を題材とし、1931(昭和6)年の作と考えられる。歌詞は以下の通り⁶⁸。

- 一、朝の下部は 権現様の 杉の木にまで
霧が立つ 霧が立つ
※ヨイヨイヨイシヨコリヤ 霧が立つ
- 二、啼くな蝸 今日来たばかり 明日も下部に
わしや泊る ※ わしや泊る わしや泊る
- 三、天狗岩から 川下見れば 水に小石が
流される ※ 流される 流される
- 四、今日は下部も 信玄公の 隠し湯なれど
隠されぬ ※ 隠されぬ 隠されぬ
- 五、枯れた枝さえ 降る白雪に 冬は下部の
花と咲く ※ 花と咲く 花と咲く
- 六、桜並木の 桜の下で 下部出るときや
袖しぼる ※ 袖しぼる 袖しぼる

IV. 『微細郷土研究：加納岩町に関する』における民謡

1. 山梨県女子師範学校における郷土教育

では、1924(大正13)年に新設されたばかりの山梨県女子師範学校では、郷土教育がどのように展開されていたのであろうか。

本校においては曩に文部省より交附せられたる郷土研究施設費によつて郷土室を新設し、同室

を中心として諸種の郷土教育をなし来つたのであるが、昭和九年度においてほぼその充実を見たので、昭和十年度を迎ふるに当つて体系的な郷土の研究を企画し、師範学校独自の立場と使命とに鑑み、生徒が卒業後奉職たる町村を全体的総合的に認識するに必要な予備知識を把握せしむるため研究対象を本校の所在地たる山梨県東山梨郡加納岩町にとって全校を挙げて本研究に参与し各種各様の立場から総合的に本町を研究すべき方針を確立したのである。即ちまづ同年五月初旬郷土係の打合会を開くこと数度にして研究の大綱を決定し、つづいてこれを学科主任会議にかけて各教科における研究の分野を定め、更にこれを郷土係特に地理科において整理統一して同年六月に至つて調査原案を作成した。ここにおいて実際の研究資料を蒐集するため調査用紙を作製すると共に夏季休業中において主として附属小学校の児童及び本町出身の本校並びに山梨高女の生徒に依頼して殆んど本町の全戸に亘つて調査を遂げたのである。九月に至りこの大量の資料を整理する必要上一部三年以上及び二部全体の生徒を各研究に分属せしめ鋭意その整理に当つたのであるが、十月に至つて文部省の山梨県を対象とする総合研究の企があつたため本研究は一時その完成を延期するの已むなきに至つたのである⁶⁹。

上記から、山梨県女子師範学校では、1930（昭和5）年、文部省から交付された郷土研究施設費により、郷土室を新設し、郷土教育が開始されたことが読み取れる。1934（昭和9）年度には、「充実を見た」と記され、1935（昭和10）年度を迎ふるに当り、加納岩町（現、山梨市）を研究対象とし、体系的な郷土の研究を企画していた。5月初旬の郷土係の打合会に続き、学科主任会議で検討される。6月には調査原案が作成され、夏季休業中に附属小学校の児童および加納岩町出身の山梨県女子師範学校と山梨県山梨高等女学校の生徒に依頼して、加納岩町の調査が実施された。しかしながら、1935（昭和10）年秋に『山梨県総合郷土研究』の編纂の依頼が入り、山梨県女子師範学校の郷土教育の成果発表は延期となる。

超えて十一年五月に入り、『山梨県総合郷土研究』がほぼその完成を見たので再び本研究に還り、まづ前年度における調査原案に厳密なる再検討を加へ殆んどその全部に亘つて改訂を加へ新に

調査を要するものは前年度と同様の方法を以て新資料の蒐集に勉め、調査の完璧を期したのである。かくて孜々として調査研究を進め、十二年一月においてほぼその研究を完了したので、更に本町の隣接町村の大勢を参考資料として調査し、二月中旬に於て全く原稿の作成を終つた。二月十九日、偶々東京における文部省主催の郷土教育講習会に出席せる受講者の本校来観があつたので、研究を要約して発表し種々の有力なる意見に接することの出来たことも本研究のためまことに喜ぶべきことであつた⁷⁰。

1936（昭和11）年5月以降、山梨県女子師範学校の郷土教育が再開される。1937（昭和12）年1月には、加納岩町の調査をほぼ終え、隣接町村についても調査を広げ、参考資料とする。同年2月には原稿の作成を終え、1937（昭和12）年3月30日印刷、4月20日発行となる。

2. 『微細郷土研究：加納岩町に関する』の構成

1937（昭和12）年、山梨県女子師範学校編『微細郷土研究：加納岩町に関する』が発行される。校長の小畑善吉は、企画した所以について以下の点を挙げる⁷¹。

一、文部省の指導によつて完成した山梨県の総合郷土研究の一細胞として研究対象を本校の所在地たる加納岩町に限定して微細にこれを調査研究し以て前記の総合郷土研究をして一層価値あらしめようとしたこと。

一、師範学校独自の目的に立ち、生徒をして郷土の調査研究についての学的興味を喚起し、併せて卒業後において奉職町村について正鵠なる総合的認識を得るための研究方法を把握せしめようとしたこと。

一、郷土を調査研究することは、調査研究を遂げることより進んでこれを実際教育上に運営することにその大きい目的が繫つてゐるのであるからこの意味においてこの研究の結果を小学校教育の上に応用し、教育の地方化實際化を計らうとしたこと。

一、町村の発展はその実相についての正しき認識の上に始めて齊されるものであることはいふまでもないことであつて、本研究によつて町村の発展に有力なる資料を提供しようと考へたこと。

『微細郷土研究：加納岩町に関する』の目次は以下の通りである。

口絵
序文
加納岩町の概観
自然環境
歴史的環境
産業
交通状態
人口現象
聚落
財政
文化状態
研究経過報告
跋

3. 『微細郷土研究：加納岩町に関する』における民謡

『微細郷土研究：加納岩町に関する』において「民謡」は「文化状態」の大項目の中に掲載される。「文化状態」は以下の中項目によって構成される。

- 一 宗教と信仰
- 二 言語
- 三 伝説
- 四 民謡
- 五 文化的記念物
- 六 教育
- 七 地方気質
- 八 家族生活
- 九 社会生活

「四 民謡」は、267 から 271 ページにかけて、「I 加納岩町と民謡」、「II その他」、「III 前記以外」、「IV 本町及隣接町村」の順で構成される。執筆は、音楽ではなく、国語科を専門とする、堀内馨教諭と以下の4名の生徒によってなされる⁷²。文学運動の一環で民謡の研究がたちあがった当時の動向と一致する⁷³。

井上駒（二部2年）
重原美喜子（二部2年）
唐澤静子（一部3年）
堀水叶枝（一部3年）

「I 加納岩町と民謡」の冒頭は、次のように始

まる⁷⁴。

加納岩町は南は重川、西は笛吹で限られ楔形の地形で、北に境する日下部町とは反対な寂しい農村で人呼んで「里山家」と言つたが、中央線の開通、軍川橋の架橋、根津橋の開通で本来の地の利を遺憾なく發揮せし上に、諸学校の移転、又開校を見て、今日の繁栄をなすに到つた。この「里山家」の名の如く、特色ある民謡もなかつたやうだが、ただ下神納川部落氏神の十月六日の祭典に奉悼角力と称し、幕府時代より今日もなほ行事否神事として行はれてゐる角力甚句歌は、ここ等を中心に他部落に及ぼしたものであるが、甚句歌は今日は殆んど歌はたない。田植唄、機械唄、其の他にも郡内平野一団のもので、特に加納岩町の所産とも言へない。盆唄は加納岩町としては明治に入つて全く姿を消してゐて、むしろ山附方面の接続地に残存したが、町の発展と共に一事萬事をリードする形で民謡とても其のやうな工合で長野より移入した木曾節の流行と共に盆踊、盆唄も加納岩町が中心をなすの感がある現況である。

上記に続き、「1 田植唄」、「2 機械唄」、「3 角力甚句」、「4 盆踊唄」の項目ごとに、民謡の歌詞と解説が記される。

「II その他」では、「古く本町及び近接町村で謡はれたものの中代表的のもの」が挙げられ、「馬子唄」、「綿打唄」、「遊戯唄」、「田植唄」、「製糸工女の唄」、「手鞠唄」、「子守唄」、「雑謡」ごとに、歌詞のみ紹介される。

「III 前記以外」、「IV 本町及隣接町村」では、「本町及び隣接町村で謡はれた民謡を時代別に類別」されており、一覧にしたものが表1である。

表1 謡われた民謡（時代別）

時代	全国の民謡	山梨県の民謡
明治	《磯節》茨城 《安来節》島根 《佐渡節》新潟 《八木節》群馬 《大島節》東京 《農兵節》静岡 《三階節》新潟 《米山甚句》新潟 《串本節》和歌山 《よさこい節》高知 《伊那節》長野	《粘土節》中巨摩
大正	《潮来音頭》茨城 《おいとこ節》宮城 《錦旗羅綿節》熊本 《草津節》群馬	
昭和	《小原節》鹿児島 《東京音頭》東京	《甲斐の四季》甲府 《甲州音頭》甲府 《甲州小唄》甲府 《笛吹音頭》日下部 《萬力小唄》日下部

注 山梨県女子師範学校編『微細郷土研究：加納岩町に関する』1937年，p. 271 から作成。

《粘土節》は、御勅使川が釜無川へ直角に流れ込む、甲斐市竜王町の農民たちが、堤防造りの粘土つきの拍子に合わせて唄ってきた仕事唄であった。後に、三味線がつけられ、韮崎市の花柳界でお座敷唄となり、甲府市にも広がる⁷⁵。表1では、明治時代に類別されている通り、新民謡ではない。

《甲斐の四季》は昭和時代に類別されているけれども、1906（明治39）年につくられた。前述の『山梨県総合郷土研究』においても、新作民謡として紹介されていたが、異なる。「一府九県連合共進会」が甲府市で開催された1906（明治39）年、山梨県知事であった武田千代三郎（1867-1932）が作詞し、清元小梅が作曲し、市川しんが振り付けする。宴会などで芸妓に唄い踊られた。歌詞は以下の通りで、山梨県の景観を賛美紹介している⁷⁶。

一、霞こめたる富士が嶺の
残んの雪もいつしかに

東風吹きそめて笑い顔
とけて嬉しき桂川
※ヨイヨイヨイヤサ
二、登る若鮎せきとめて
誰が作りしか滝の糸
高く掛けたる猿橋の
大月清き夕涼み ※
三、秋を知れやと笛吹の
流れの奥の金峰山
樹木の錦は瑞牆の
光り尊き御嶽道 ※
四、木枯おろす八ヶ岳
誰も寒さは身にしみじみと
思いぞ積る小淵沢
来る春を待つ冬ごもり ※

おわりに

このように、山梨県師範学校ならびに山梨県女子師範学校では、新民謡を積極的に取り上げていたことが判明した。『山梨県総合郷土研究』では、「郷土愛を主とする歌謡を新作奨励し、此等地方的新民謡に依つて青年男女に高尚な趣味と健全な気風を養はしめようとする傾向が著しくなつて来た」と新民謡を高尚な趣味と健全な気風と好意的にとらえている⁷⁷。

山梨県における新民謡を整理したものが、表2である。作詞に関しては、野口雨情が3曲、西条八十が3曲。作曲に関しては、中山晋平が4曲、町田嘉章が3曲、藤井清美が2曲と、新民謡の大御所によってつくられている。5曲のレコード化が図られ、内訳はビクターが3曲、コロンビアが1曲、ニッポノホンが1曲である。

最初にレコード化されたのは、1927（昭和2）年の野口雨情作詞、中山晋平作曲の《甲州音頭》ではあるが、それ以前の1925（大正14）年に《縁故節》が発表されている。《縁故節》は大御所によってつくられたのではなく、韮崎の有志で結成された「白鳳会」により、観光の宣伝歌としてつくられた⁷⁸。まさに地域の発展を願って、地域の人々によってつくられた地域の新民謡である。

2021（令和3）年度、現在、小中学校の音楽教科書は2社から発行されている。その内の1社である、教育芸術社では、小学校、中学校ともに山梨県の代表的な民謡として、新民謡である《縁故節》が掲載されている⁷⁹。『山梨県総合郷土研究』では40曲の「新作民謡」が紹介された中、《縁故節》については

代表的な民謡として位置付けられ、唯一、解説も加えられていた。このような師範学校での位置付けが、戦後の音楽教育にも影響を与えている。

他方、『山梨県総合郷土研究』の「民謡」のページの執筆に協力した、山梨県師範学校の卒業生の澤登初義は、戦後、新民謡の《武田節》をうみ出す。

ところで、文部省は、山梨県に続いて、1936（昭

和11）年には、秋田県、茨城県、香川県を指定して、各師範学校を中心とした『総合郷土研究』の編纂を企画した。今後はこれらの県についても調査を広げ、師範学校の郷土教育における新民謡の位置付けと戦後の音楽教育への波及についても追究していきたい。

表2 山梨県における新民謡

	曲名	年	作詞	作曲	振付	レコード発売年	掲載
1	縁故節	1925(大正14)	白鳳会	蕪崎芸妓		コロムビア 1939	○
2	甲州音頭	1927(昭和2)	野口雨情	中山晋平	花柳徳吉	ビクター1927	◎
3	甲州小唄	1928(昭和3)	西条八十	町田嘉章	藤間静江	ニッポノホン 1929	◎
4	新作甲州小唄	1931(昭和6)	西条八十	町田嘉章	藤間静江		
5	甲府セレーナーデ (甲府夜曲)	1931(昭和6)	西条八十	中山晋平			○
6	甲府車窓行進曲	1931(昭和6)	市川青児	中山晋平	花柳徳吉		○
7	下部小唄	1931(昭和6)	野口雨情	中山晋平			
8	山梨小唄	1933(昭和8)	長田幹彦	藤井清水		ビクター1934	
9	甲州音頭	1933(昭和8)	千田冬彦	藤井清美		ビクター1934	◎
10	ゑびす講音頭	1934(昭和9)	篠原春雨	中御門忠泰	花柳徳吉		○
11	昇仙峡	1935(昭和10)	刑部陽	坂口五郎			
12	郡内小唄		野口雨情				○
13	身延音頭		結城玉容	町田嘉章			○
14	富士川音頭		平賀文男	平賀文男			○
15	下部音頭		関根利根雄	関本京静			○
16	山梨遊覧小唄						○

注 ◎：『山梨県総合郷土研究』、『微細郷土研究：加納岩町に関する』に掲載。

○：『山梨県総合郷土研究』に掲載。

謝辞

本稿を作成するにあたり、神奈川県海老名市教育委員会教育部教育総務課文化財係から資料提供をいただきました。ここに記して、お礼、申し上げます。

付記

本研究は、JSPS 科研費 21K02465(基盤研究C「戦前の新民謡運動を契機とした師範学校における郷土教育の展開と戦後への波及」)の助成を受けたものです。

¹ 伊藤純郎『増補 郷土教育運動の研究』思文閣出版、2008年、pp.95-169。

² 同書、pp.361-407。

³ 同書、pp.170-231。

山崎準二「小田内通敏の経歴と著作・関係文献目録：文献調査及び聞き取り調査の第一次整理」『静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学

篇』34号、静岡大学、1984年、pp125-141。

⁴ 外池智『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究：『総合郷土研究』編纂の師範学校を事例として』NSK出版、2004年。

⁵ 上田誠二『音楽はいかに現代社会をデザインしたか：教育と音楽の大衆社会史』新曜社、2010年、p.27。

- 6 山梨県編『山梨県史』通史編4近世2, 山梨日日新聞社, 2007年, pp.523-534。
- 7 真壁仁『徳川後期の学問と政治』名古屋大学出版会, 2007年, p.115。
- 8 1858(安政5)年,「駿府学問所」が設立され, 1861(文久元)年,「明新館」と改称されるものの, 1868(慶応4)年, 廃館。1868(明治元)年,「府中学問所」が開設され, 1869(明治2)年,「静岡学問所」と改称。
影山昇「明治初年の静岡藩の学校教育: 静岡学問所と沼津兵学校及び同附属小学校を中心にして」『放送教育開発センター研究紀要』第11号, 放送教育開発センター, 1994年, pp.81-128。
- 9 丸田銚二郎編『山梨大学学芸学部沿革史』山梨大学学芸学部, 1964年, pp.14-265。
- 10 同書, pp.23-50。
- 11 同書, pp.85-88。
- 12 外池, 前掲書, pp.251-254。
- 13 丸田, 前掲書, p.88。
- 14 山梨県師範学校編『郷土教育の施設と経営』山梨県師範学校, 1933年, pp.6-11。
- 15 丸田, 前掲書, pp.91-93。
- 16 外池, 前掲書, pp.174-177。
- 17 同書, p.178。
- 18 同書, p.179。
- 19 同書, p.184。
- 20 第31回海老名市温故館企画展「海老名の記憶遺産: 中山耕一郎氏の記憶画と100年前の人々のくらし」パンフレット, 海老名市温故館・海老名市教育委員会, 2012年, p.3。
海老名市編『相模国分寺研究の先駆者 中山每吉: その人と業績』海老名市史叢書1, 海老名市, 1995年, pp.173-174。
- 21 1926(大正15)年3月, 東京音楽学校甲種師範科卒業後, 山梨県師範学校教諭として奉職。
- 22 澤登初義『甲斐の歌謡 風林火山: 出会いと人生』1998年, pp.11-12。
- 23 山梨県師範学校編『創立六十周年記念誌』山梨県師範学校, 1935年, pp.279-281。
- 24 山梨県師範学校・山梨県女子師範学校編『山梨県総合郷土研究』朗月堂書店, 1936年, p.840。
- 25 同書, p.844。
- 26 長野隆之「山梨県の「粘土節」をめぐる言説」『日本歌謡研究』42号, 日本歌謡研究学会, 2002年, p.97。
- 27 山梨県師範学校・山梨県女子師範学校, 前掲書, pp.845-846。
- 28 長坂町誌編集委員会編『長坂町誌 下巻』長坂町, 1990年, p.923。
- 29 山梨県師範学校・山梨県女子師範学校, 前掲書, p.847。
- 30 同書, p.847。
- 31 同書, p.847。
- 32 竹内勉『日本民謡事典Ⅱ 関東・甲信越・北陸・東海』朝倉書店, 2018年, pp.376-377。
- 33 竹内勉『日本民謡事典Ⅲ 関西・中国・四国・九州』朝倉書店, 2018年, pp.614-615。
- 34 竹内, 前掲書, 関東・甲信越・北陸・東海, pp.266-269。
- 35 竹内, 前掲書, 関西・中国・四国・九州, pp.579-584。
- 36 竹内, 前掲書, 関東・甲信越・北陸・東海, pp.399-402。
- 37 竹内勉『日本民謡事典Ⅰ 北海道・東北』朝倉書店, 2018年, pp.3-8。
渡辺裕『サウンドとメディアの文化資源学』春秋社, 2013年, pp.155-226。
- 38 森垣二郎『レコードと五十年』河出書房新社, 1960年, pp.143-144。
- 39 同書, p.143。
- 40 竹内有一「第11章 かっぱれ百態」細川周平編『民謡からみた世界音楽: うたの地脈を探る』ミネルヴァ書房, 2012年, pp.193-209。
- 41 文化庁 日本映画情報システム
東海の顔役 | 日本の映画情報を検索 日本映画情報システム (japanese-cinema-db.jp)
(2021年8月20日閲覧)
- 42 白鳥省吾『現代歌謡百話』東宛書房, 1936年, pp.39-40。
- 43 中山卯郎『中山晋平作曲目録・年譜』芸術現代社, 1980年, p.218。
- 44 竹内, 前掲書, 関西・中国・四国・九州, pp.691-693。
中山, 前掲書, p.333。
その他, 富山県には《越中オワラ節》がある。
長尾洋子『越中おわら風の盆の空間誌: くたの町』からみた近代』ミネルヴァ書房, 2019年。
- 45 竹内, 同書, pp.535-537。
- 46 中山, 前掲書, pp.331-333。
上田, 前掲書, pp.201-230。
- 47 同書, p.847。
- 48 同書, p.847。
- 49 同書, p.847。
- 50 植松逸聖「島原の子守歌は縁故節の盗作 三: その一 縁故節はこうして生まれた」藤巻幹城編『中央線』第24号, 中央線社, 1983年, pp.137-145。
- 51 植松逸聖「郷土研究 縁故節四方山話」佐藤森三編『中央線』第8号, 中央線社, 1972年, pp.50-57。
手塚洋一『山梨の民謡』山梨ふるさと文庫, 1987年, pp.42-54。
- 52 手塚, 前掲書, pp.42-43。
- 53 東道人『野口雨情 詩と民謡の旅』踏青社, 1995年, pp.537-539。
- 54 中山, 前掲書, p.216。
- 55 甲府市市史編さん委員会編『甲府市史』別編Ⅰ 民俗, 甲府市役所, 1988年, p.404。
- 56 町田嘉章『世界音楽全集 日本新民謡曲集』第43巻, 春秋社, 1933年, p.238。
- 57 同書, p.238。
西条八十著作目録刊行委員会編『西条八十著作目

録・年譜』中央公論事業出版，1972年，p.216では，西条八十作詞，町田嘉章作曲の《甲州音頭》が1928（昭和3）年に発表と記されているが，定かではない。

- 58 甲府市，前掲書，pp.406-407。
 59 同書，p.407。
 60 甲府市，前掲書，p.399。
 61 野口雨情『定本 野口雨情』第五巻，未来社，1986年，pp.142-143。
 62 町田，前掲書，p.238。
 63 手塚，前掲書，pp.190-191。
 64 身延町誌編集委員会編『身延町誌』身延町役場，1970年，p.1145。
 65 呉市昭和地区郷土史研究会編『作曲家藤井清水』呉市昭和地区郷土史研究会，1962年，p.250。
 66 同書，p.250。
 67 下部町編纂委員会編『下部町誌』下部町役場，1981年，pp.1811-1812。
 68 同書，p.1812。
 69 山梨県女子師範学校編『微細郷土研究：加納岩町に関する』山梨県女子師範学校，1937年，p.425。
 70 同書，p.425。
 71 小畑善吉「序」山梨県女子師範学校編『微細郷土研究：加納岩町に関する』1937年。

- 72 山梨県女子師範学校，前掲書，p.426。
 73 渡辺，前掲書，p.159。
 74 山梨県女子師範学校，前掲書，p.268。
 75 竹内勉『日本民謡事典Ⅱ 関東・甲信越・北陸・東海』朝倉書店，2018年，p.370。
 76 甲府市，前掲書，p.402。
 77 山梨県師範学校・山梨県女子師範学校，前掲書，p.840。
 78 1957（昭和32）年，宮崎康平（1917-1980）作，古関裕而（1909-1989）編曲の《島原の子守唄》のレコードが，コロムビアから吹き込まれた。曲の前半部分が《縁故節》に類似している。《縁故節》は福岡県宗像市の大島に渡り，《七夕の唄》になった。戦争中，宮崎は大島に保養のために約1カ月間，滞在していた。植松逸聖「島原の子守唄は縁故節の盗作 一」『中央線』中央線社，1982年，pp.159-171。高尾稔『盲目の作家 宮崎康平伝』創思社出版，1986年，pp.74-77。竹内，前掲書，関西・中国・四国・九州，p.642。
 79 小原光一『小学生の音楽4』教育芸術社，2000年，pp.30-31。小原光一『中学生の音楽1』教育芸術社，2021年，p.62。